

八幡川 植物 ガイドブック



八幡川 植物 ガイドブック

八幡川の四季を訪ねて



このガイドブックは、2001年3月発行の
「八幡川ウォーキングマップ」と合わせてご利用ください。
わたしたちの住む佐伯区にも美しい所やいろんな人の暮らしがあります。
是非、先人の生きた智慧を未来のために生かしていきたいものです。

【参考文献】

- 『日本の野草』発行 山と溪谷社
- 『山梨がけつり園集1 春の花』発行 山と溪谷社
- 『山梨がけつり園集2 夏の花』発行 山と溪谷社
- 『山梨がけつり園集3 秋の花』発行 山と溪谷社
- 『山梨/レンディ園集4 野に咲く花』発行 山と溪谷社
- 『山梨/レンディ園集5 山に咲く花』発行 山と溪谷社
- 『ヤマケイ山梨がけつり園集』発行 山と溪谷社
- 『樹木 春夏秋冬』発行 山と溪谷社
- 『樹木 秋の園』発行 山と溪谷社
- 『山梨/レンディ園集 樹に咲く花 合弁花』発行 山と溪谷社
- 『山梨/レンディ園集 樹に咲く花 蕁弁花1』発行 山と溪谷社
- 『山梨/レンディ園集 樹に咲く花 蕁弁花2』発行 山と溪谷社
- 『新山梨園』発行 オオラ社
- 『長野日本植物図鑑』発行 北信館
- 『日本の樹木(1)雑草』発行 保育舎
- 『日本の野草-雑草』発行 保育舎
- 『自然の中で楽しむ植物観察の野草500種』発行 山と溪谷社
- 『日本の樹木 上』発行 小学館
- 『日本の樹木 下』発行 小学館
- 『野草100種の見分け方』発行 保育舎
- 『日本の野草』発行 小学館
- 『誰がたの食べられる山野草』発行 保育舎
- 『花の色別 誰がたの植物図鑑(春-夏編)』発行 保育舎
- 『花の色別 誰がたの植物図鑑(秋-冬編)』発行 保育舎

【編 集】 やはたがわまっぶくらぶ 自然環境グループ
【発 行】 広島市佐伯区役所
【協 力】 広島市五日市公民館

R270

印刷紙の約70%再生紙を使用しています

【広島市佐伯区】

目次

八幡川
植物
ガイドブック

CONTENTS



地元のシダレザクラ (八幡川沿いの桜並木)

八幡川の四季



四季折々の八幡川の美しい自然をいつまでもと願いを込めて、そして小さな発見で、大きな感動をして欲しい。花をめぐることで、自然を愛することに、環境を守ることにつながることを願って…そんな思いでやはたがわまっぶくらぶはこの冊子をつくりました。

植生分布

この図鑑では、それぞれ植物の生息している地域を、「上流は ●、中流は ●、下流は ●」と色別して表記しています。

八幡川周辺の春

八幡川
周辺
ガイドブック

春の七草



セリ(セリ科)



ホトケノザ(コオニタビラコ(キク科))



ハコベ(ナズシロ科)

春といえば、先ず春の七草を思い浮かべます。本来、七草の風習は古来より中国に伝わるもので、正月七日に7種の菜を熱い吸い物に入れて食べると万病にかからないというものでした。日本では、その風習を平安初期に宮中でまねたのが始まりでした。それが一般庶民に広がり、室町中期には「せり、なすな、おぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろこれぞ七草」と歌われ、朝がゆに七草をいれて炊き、無病息災を願う行事として今に伝わります。七草の種類もいろいろな説がありますが、現在、次の説が有力です。

セリ ●●● 高さは20~50cmで、湿地や溝の中によく茂っています。夏に白色の小花を多数つけます。よく似た同じ科のドクセリは有毒なので誤って採取しないよう注意が必要です。

ナスナ ●●● 高さは30cmで郊外の道端、田んぼ、庭に生えます。春に白色で小形の十字状の花を多数つけます。別名ベンベン草。

オギョウ ●●● 15~40cmでどこの空き地、道端でも見られます。花は黄色で全体に柔らかな毛が生えています。別名ハハコグサ。



ハハコグサ(キク科) 別名:オギョウ



ナスナ(アブラナ科)



カブ(アブラナ科)



ダイコン(アブラナ科)

ハコベ ●●● いたるところに生える1~2年草。高さは10~30cmで全体に柔らかく、よく分岐します。花は3~9月に直径6~7mmの白い花をつけます。1年中、利用できます。

ホトケノザ ●●● シソ科のホトケノザではなく、本種はキク科の田や畦にはえる**コオニタビラコ**をさします。ロゼット状に4~10cmの葉で羽状に切れ込みがあります。春に黄色い舌状の小花をつけます。

スズナ(カブ) ●●● カブのことで地中海沿岸地帯が原産地で、中国から日本へ入ったといわれています。葉を漬物にするために育成されたものが**ノザワナ**で大型の**天王寺カブ**から選抜されたものが本種です。ヨメナ、アザミ、ミズナとする説もあります。

スズシロ(ダイコン) ●●● ダイコンのことで、古くから野菜として利用されています。

春の八幡川を散策すると、足元にはさまざまな花たちが可憐に咲いています。春の花はとても彩りが鮮やかで個性豊かです。

かつては八幡川の土手にはたくさん菜の花が見られましたが、平成11年の災害でめっきり数が減りました。

畑や道端に生える高さ10～30cmの1～2年草で、紅紫色のくちびる形の花を車状につけます。名は葉が仏像などの「蓮華座」に似ることからつけられました。春の七草のホトケノザはコオニタビラコのこと、本種ではありません。誤食しないよう注意が必要です。別名サンガイグサともいいます。



ホトケノザ (シソ科)



ヒメオドリコソウ (シソ科)

明治中期に渡来したヨーロッパ原産の帰化植物です。高さは10～25cm、葉の縁は鋭いこざり状で網目状の脈が目立ちます。上部は密集して赤紫色を帯びます。長さ約1cmのくちびる状の花を密につけます。田の畦や土手に咲いています。

⑤

日当たりのよい道端に多い多年草。高さは開花時で5～25cm程度ですが、花後つる状になって垣根を乗り越すほど伸びることからこの名がつけました。茎、葉ともに細かい毛があり、特有の臭いがあります。



カモドハラシソ (シソ科)



ほしかけまん (ケシ科)

田や人里の林縁など少し湿ったところに生える2年草で高さは20～50cmになります。葉は何回も裂け、葉は角張っていて柔らかく折ると悪臭があります。仏堂の鏡川に使う「蓮華」に似ることからこの名がつけました。なお、本種は有毒植物です。

日当たりの良い草地に生える多年草で、高さは7～12cm。葉は長いへら形で、すべて根元から出て長い葉柄の両側に目立った翼がつけます。スミレは早春の花として、道端に可憐な花を咲かせますが、花が咲いた後に種がつくことはほとんどなく、その後、開かない花をつけ、自分の花粉で種子をつけます。



スミレ (スミレ科)

⑥



ハナニガナ(キク科)

山野や丘陵に生え、高さ30~70cmになります。茎は上部で分枝し5~7月に黄色の花を多数つけます。ニガナより花が大きく、花びらのように見える部分の数もニガナの5個に対し7~12個と多く、晴天以外は花を開きません。シロバナニガナの変種とされ、別名オオバナニガナといいます。また、折ると白い乳液が出るので「乳草」ともいいます。

大正時代、観賞用に日本に持ち込まれた北アメリカ原産の帰化植物で、別名ハルジオンといいます。高さは30~60cmで、3~5月に薄紅色の垂れ下がったつばみをつけ、開くにしたがって上向きになり花色が薄くなります。また、茎が中空で、葉は茎を抱くようにつくのが特徴です。ハルジオンと良く似ていて、一回り小型の花をつけるものにヒメジオンがあります。



ハルジオン(キク科)

2

道端や畑に生え、高さ20~100cmになります。根元の葉はロゼット状につき深く割れていて、茎や葉を切ると白い乳液が出ます。花は直径7~8mmの黄色で、春の七草のコオニタビラコに似ていますが、本種はかなり大きいので区別が容易です。



オニタビラコ(キク科)



フキ(キク科)

林縁、丘陵に生える、高さ20~50cmの多年草です。早春、2~3月頃に葉に先立って花をつけます。フキノトウがまだつばみのころに花茎を採取し、食用とします。葉柄は5月から秋に採取し、アク抜きをきちんとし皮をむいて利用します。

西日本の人里で、ごくふつうに見られるタンポポ。高さ20~40cmでセイヨウタンポポが日本全土に広まる前は、白いタンポポしか見られなかったという地方もありました。外来種のセイヨウタンポポは花の付け根のがく片が反り返るので容易に区別できます。



シロバナタンポポ(キク科)

3

北アメリカ原産の帰化植物です。高さは20～50cmで薄紫色の花をつけます。茎から交互に出た厚ぼったい若い葉が松の葉を思わせることからこの名がつけました。大正時代に日本に渡来したという説もありますが、広島県内では1941年に向島(尾道市)で発見されました。



マツバウンラン(ゴマンノハグサ科)

明治初期にヨーロッパから渡来した帰化植物。高さは10～25cmで日当たりの良い道端に小さな花をつけます。このイヌノフグリという名は、実の形が犬のふぐり「イヌノフグリ」に似ていることからつけました。在来種のイヌノフグリはほとんど見かけなくなりました。



イヌノフグリ(ゴマンノハグサ科)



ニワゼキショウ(アヤメ科)

北アメリカ原産の帰化植物。高さ10～20cmの小形の多年草。茎の先端から2～5個の柄を次々に出し、直径1.5cmほどの薄紫や白の花を咲かせます。種が入っている「さく果」は光沢のある球形。庭に生え、葉がセキショウに似ていることからニワゼキショウと名がつけました。

ヨーロッパ～西アジア原産の帰化植物で高さは15～40cmの1年草。3枚の羽状の葉がつきます。花はかたまってつき、淡黄色から淡黄褐色に変わります。花の部分は枯れても残り、がくとともに果実を包みます。別名はキバナツメクサといひます。



キバナツメクサ(マメ科)



カラスノエンドウ(マメ科)

道端などに見られます。高さ70～150cmのつる性の植物です。紅紫色の蝶形の花をつけます。花後、豆果ができます。名の由来はスズメノエンドウとの大きさを対比したものであるという説や、完全に熟すとサヤや種が黒いのでカラスをつけたという説もあります。



レンゲソウ(マメ科)

中国原産の帰化植物で、高さ10～25cmの2年草。花茎の先に蝶形の花を10花ほど輪になってつけ、ハス(蓮華)に似ます。根と共生するバクテリアの働きを利用して土中に窒素(葉肥)を固定することから、よく田に植えられました。別名はゲンゲ。



春先にどこからとなく風に乗って漂ってくる独特の匂いは、たいていこのヒサカキの花の匂いです。



地味な花ですが、ろう組工のような花が可愛です。

ヒサカキ(ツバキ科)

山地に生える常緑小高木で高さは4~8mになります。葉は楕円形でやや厚く、縁がのこぎり状です。3~4月頃、葉の脇に直径5~6mmの白い花をつけます。花弁は5個で、雄花にはおしべが10~15個、雌花にはめしべが1個あります。果実は4~5mmの球形で晩秋に黒紫色に熟します。中部・関東地方では枝をサカキの代用として神事に使います。

ヒサカキはこの写真のように、まれに赤花をつける木もあります。

ヒサカキはこの写真のように、まれに赤花をつける木もあります。



アサヒ(ツツジ科)

アサヒ(ツツジ科)

高さ2~4mの常緑低木。寒さや乾燥にも強く丈夫な木です。葉は広く先がとがっています。幹は成木になるにつれておじ曲がって堅くなります。たくさんの釣鐘状の白い花をぶら下げます。本種は有毒植物であるので動物も食べず、いたるところに残っています。

エゴノキ(エゴノキ科)

山野に生える7~8mの落葉高木です。新枝の先に直径2.5cmほどの白い5枚の花びらをもち、下向きにぶら下げるように咲かせます。葉は卵形で先が鋭くとがっています。果実は玉状でぶら下がり、果皮は有毒のエゴサポニンを含むので、注意が必要です。



エゴノキ(エゴノキ科)



ヒメコウゾ(クワ科)

ヒメコウゾ(クワ科)

人家に近い山地に自生する高さ2~5mの落葉低木。一つの木に雄花と、雌花がつき、雌花は球形で長い糸状の花柱が周りに伸びます。オレンジ色の果実は甘く食べられます。コウゾはヒメコウゾとカジノキの雑種と考えられます。

コバノミツバツツジ(ツツジ科)

西日本一帯の雑木林に生える高さ1~3mの落葉低木。幹から多数の枝が分岐し、葉は小さく、枝先に3枚ずつ車状につけます。花は紅紫色で、4~5月頃、葉の間く前に開花し、花の時期には、木全体が花一色となります。



コバノミツバツツジ(ツツジ科)